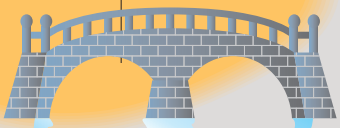
nagasaki topics

日本最初のアーチ型石橋の建造に尽くした黙子如定

一六三二渡来～一六四四



世界に開かれた貿易港，長崎の歴史を300年にわたって見つめてきた川と橋があります。蛍茶屋から繁華街へと流れ，出島へそそぐ中島川とこの川にかけられた多くの石橋群がそれです。

その昔，荷をたくさん積んだ船が入港して，この川の両岸につながれ，オランダ商人の住む出島や，中国商人の住む町をはじめ，中島川沿いにある商店街は活気に満ちあふれていました。大勢の人夫たちが，せわしげに荷物の積みあげに汗を流している姿を，あちこちでみかけることができました。

この中島川に最初のアーチ型石橋をかけたと伝えられている人が，興福寺の二代住職，黙子如定和尚です。和尚は中国の江西省建昌県の出身で，34歳のときに長崎へ来て，2年後に興福寺の住職となりました。興福寺は寺町の中ほどに建てられた中国人のお寺で，長崎の唐寺の中では最も古く，山門が朱塗りのため「赤寺」と呼ばれて，人々に親しまれてきました。山門を出て200メートルほど下ると中島川が見えてきます。如定和尚はこの川を通るたびに，なにやらもの思いにふけった様子で，手をほおに当てこの川に丈夫で壊れない橋をかけたいものだと考えていました。

中島川は，今でこそ，上流に本河内水源地ができて，水量が調節されるようになったので，洪水の危険は少なくなりましたが，江戸時代は，雨が降るとたちまち増水し，人々は何日も川止めにあって苦しんでいました。また，大雨が降り続いたときには中心地にある商店街をつなぐ木橋を押し流し，町中を大混乱におちいらせることもしばしばでした。商いで繁栄する長崎の人々にとって，橋はかけがえのないものであり，洪水にも壊れない橋をかけたいというのが人々の願いでした。

如定和尚は，川の流れを見つめながら，遠い生まれ故郷へ思いをはせました。中国では，石を積み重ねて円型に組み合わせたアーチを造り，石と石との圧力で上に乗る壁石や欄干の重さを支える技法が古くから行われていました。アーチ型の石橋には，丸味を帯びた美しさと優しさがあり，石だたみの坂が多い長崎の風情ともよく調和するし，なによりも頑丈であることが大きな魅力でした。しかし日本ではまだかけられたことはなく，技術的にも資金的にも大きな困難が予想されました。

橋を一つかけるためには，財産をつぶすほどのお金が必要であり，そのため如定和尚は裕福な商人や一般の町民，それに貿易で莫大な利益を得ていた中国商人や船員からも寄付をつのりました。さいわい，興福寺というお寺は，キリシタン弾圧のおり，幕府の厳重な取り調べをいやがった中国商人たちが，自分たちでお金を出しあって建物を造り，中国から高僧を招いて建てた寺でした。したがって，中国商人たちが興福寺によせる信頼と期待は大きいものがあり，喜んで多額のお金を寄付しました。

また，長崎は天領（幕府の直轄地）で，特定の支配大名もおらず，商業都市として自由な空気の中で発展した街でした。それだけに，自分たちの街は自分たちでつくるといった気風が強く，一般の商人や町民からもたくさんのお金が寄せられました。

寛永11年（1634），多くの住民の協力によって，長さ23メートル，幅4.7メートルの立派なアーチ型の石橋が，酒屋町と古川町の間に完成しました。最初の石橋であったためか，技術的には大事をとって二つのアーチで支えたものでした。水面に映る影と重なって見える姿を見て，人々はいつしかこの橋を「眼鏡橋」と呼ぶようになりました。柱のない，虹のような橋に初めはみんなびっくりし，おそるおそる渡ったといわれています。その後，眼鏡橋は平戸好夢という人によって一部修復され，昭和57年（1982）7月の大洪水で半壊するまで，300年ものあいだ美しい姿を誇っていました。

後には，中島川に多くのアーチ型の石橋がかけられました。それらの橋は，大手橋をかけた高一覧や一の瀬橋をかけた陳道隆など，中国商人が私財を投げうって築いたものや，お坊さんが罪滅ぼしのため一軒一軒を托鉢して集めたお金でかけたもの，奉行所が商人に頼んで築いたものです。長崎人の汗と涙と，町の発展へ寄せる思いがこめられた石橋群だといえます。これらの石橋も昭和57年（1982）7月23日の豪雨で，半分以上が流失したり，崩れたりしましたが，昭和58年（1983）に復元され，現在に至っています。

（撮影：県義務教育課）